

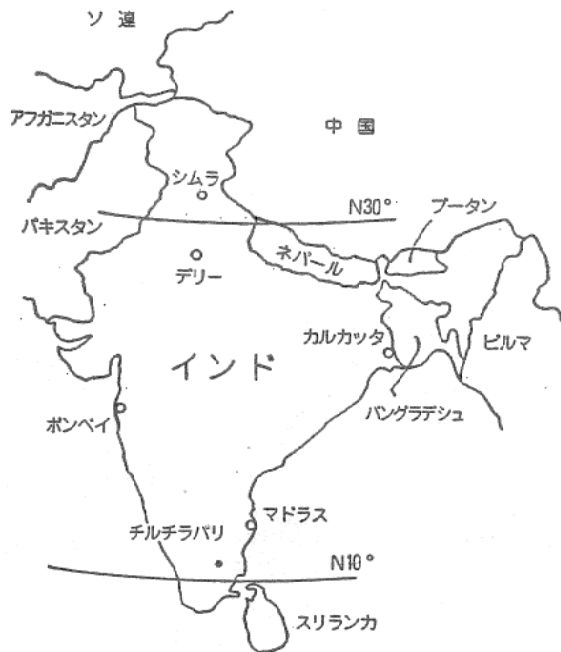


インド人研修員を迎えて

若 者

鈴木博之*

私の勤務する溶接工学研究所では国連工業開発機関 (United Nations Industrial Development Organization, UNIDO) の要請によりインド溶接工学研究所の研究指導にあたることになった。インド溶接工学研究所は UNIDO がインド政府を援助して1975年にインド亜大陸の南端に近いチルチラパリに設立されたものである。チルチラパリは、インド人曰く Hot, Hotter, Hottest の3シーズンしかないというところだそうである。



インド亜大陸略図

さて、研究指導を受けるための研修員2名が今春第一陣として来日し、本研究所において3ヶ月間の研修を終え、帰国した。大変満足して帰国したとのことである。彼らは他の部門に配属されたため実験棟あるいは廊下で顔を合わせる程度であった。

* 鈴木博之 (Hiroyuki SUZUKI), 溶接工学研究所, 溶接構造体部門, 助手, 溶接構造学

彼らが帰国してまもなく第二陣として4名の研修員が来学するという話があり、そのうちの1名は鋼材の疲れ強さについて研究を行いたいという希望を持っていた。このテーマは私たち研究室の研究テーマの一つと同じであったので、彼は私たちの研究室(溶接構造体部門)に配属されることになった。この話が学生に伝わると、ある学生は自分の研究テーマが疲れ強さに関するものでなかったことで安心した。一方、疲れ強さに関する研究を行っている学生は他の学生達から一人でインド人の世話をするように言われたり、英会話は大丈夫かとひやかされていた。そうこうしている間に4人の研修員 Mr. H. Dattarajan, Mr. T. K. Mitra, Mr. K. Sampath, Mr. C. Karthikeyan が5月18日に来学した。彼らのうちダタラーチャン氏が溶接構造体部門に配属され、私たちと共に研究を行うことになった。さらに、ミットラ氏は所属は他の部門であったが、私たちの研究室に机を持ち、研究指導を受けるために所属部門へ出かけて行く恰好となった。従って、当初の話とは異なり2名のインド人が私たちの研究室に机を置き、共に生活することになった。加えて、ダタラーチャン氏は39歳の若さでありながら、インド溶接工学研究所の No. 4 であり、彼ら4人のなかのリーダー的存在であったので、他の部門に配属されたサンパス、カルテケーヤンの両氏も頻繁に私たちの研究室を訪れた。

彼らインド人が研究室に来るようになって変わったことがあった。それは学生が研究室にいる時間が短くなったことである。つまり、以前は授業を自主休講にして研究室でウロウロしていたり、計算機センターに行くことを渋っていた学生が、インド人が来るようになって突然授業にあるいは計算機センターへと出かけて行くようになった。実際にはどこへ行って油を売っ

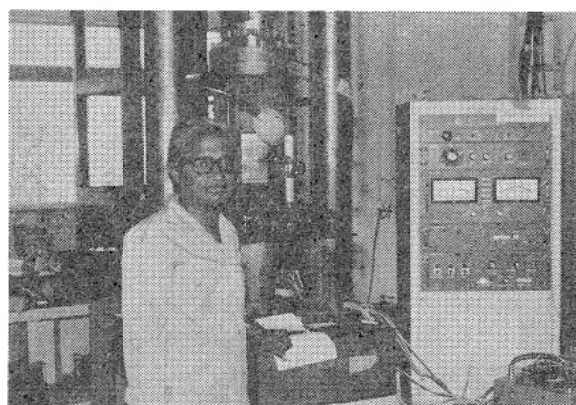
ていたのかは定かではないが？ この原因は英会話である。しかし、研究室にいる時間がたとえ短くてもインド人と生活を共にしている限り英会話を避けて通ることはできない。ダタラージャン氏にしてもミットラ氏にしても初めて訪れた日本であり、地理も分からなければ食事の違いもあるので、わずかな時間であっても学生をつかまえていろいろな質問をした。彼らが来る前に心配していた英会話が現実のものとなった。質問されればいやでも聞き取り、答えなければならず、英語力のなさを痛感していた。ちょうどこの時期には、和英辞典を片手に単語だけを並べて答えていた。話が終わってから文章を考えてみると、日本語の文型がそのまま単語だけ英語になっているというようなものであった。聞き取る方はダタラージャン氏がゆっくり話してくれたのでなんとかこなしていた。ダタラージャン氏と一諸に実験を行った学生は大変であったと思うが、他方、実践英会話によってかなり英会話力がついたのではないだろうか？ 彼はまず実験について説明し、試験機の取り扱い方を教えなければならなかった。彼がどのように説明するか興味を持ちながらみていたところ、用意周到にも彼は実験の説明と試験機の取り扱い説明書の英語版を作製してあり、それをダタラージャン氏に渡すだけで済ませた。たとえば時間がかかったとしても英作文することは受験英語で鍛えられている。

単語だけを並べていた英語も時間がたつにつれて、しだいに変わっていった。最初のうちは和英辞典を肌身離さず持っていたが、二週間程たった頃には辞書を持つこともなく何とか知っている単語を用いるようになり、さらに1ヶ月も経過した頃には、すでに英会話に対する恐怖心はまったくといていいほどなくなっていた。どうしても通じない場合には紙と鉛筆を用いていたようである。

さて、話は変わるが、溶接工学研究所では毎年7月に、所員、学生相互の親睦を深めるということで溶研祭と称するピヤパーティーを行ない、各部門がそれぞれ異った料理を持ち寄り、夏の夜のひとときを過ごすことになっている。今年の溶研祭に私たちの部門はインド料理で参

加した。買い出し、料理等すべてダタラージャン氏の指揮のもと研究室全員で作ったインドカレー2種類（辛口と甘口）とプーリー（パンの一種）は大変好評であった。辛口のインドカレーとはどの程度辛いのか楽しみにしていたが、ダタラージャン氏が言うほどには辛いと感じなかった。ダタラージャン氏の料理の手際があまりに良かったので、インドにいる時にも自分で料理をしているのかどうか聞いたところ、インドには wife がいるのでしないとのことであった。

いま一つの話は講座旅行における出来事である。夕食の時、瀬戸内海という土地柄から魚貝類の料理が多く出された。宗教の関係からであると思われるが、菜食主義者であるダタラージャン氏は今日は日本の料理にトライしてみようと言い、この料理を食べ、酒・ビールをかなり飲んだ。そして次の日の朝、腹の具合が悪く、気分がすぐれない。この原因は昨日食べた魚のせいにはちがいないと言うのである。それ故、朝食からは菜食にしてくれと言い出した。私たちからみれば小魚のせいではなく、酒の飲み過ぎだと思うのであるが、宗教の力とは恐いものである。



実験中のダタラージャン氏

本来の目的であった疲れ強さに関する研究は順調であった。試験片の作製から始まり、実験結果の整理等学生と一諸になって頑張っていた。また、実験だけでなく精力的に工場あるいは技術研究所などを訪問し、ディスカッションをしていた。十分満足できる成果が得られたことと思う。

彼らの3ヶ月間の研修期間が終わり、8月18日帰国の途についた。途中シンガポールに立ち寄るとのことであったが、3ヶ月間の単身赴任が終ったことで、心はすでにチルチラパリにあるようであった。

なお、現在、研修員の第三陣として5名のインド人が来学して研究に励んでいる。一方、私

たちの研究室の堀川助教授が9月4日から1.5ヶ月間チルチラパリに駐在している。

思いつくままに書いたので取り留めのないものとなってしまったが、御容赦願いたい。

最後に、この欄への寄稿をお勧め下さいました井上勝敬教授に感謝致します。



限りある資源を大切に……
の姿勢を守るDNT

現在は、「鉄の文明」と評され、今日の世界から鉄を無くしたら、恐らく一切の文化は終息するだろうといわれています。
DNTは、創立の礎となった重防食塗料「ズボイド」を通じて既に半世紀近く私たちの大切な鉄を守りつづけてきました。
そして、これからもDNTはズボイドを生みだした重防食技術をベースに、独自の技術開発を進め、さらに、海外の優れた技術と協力しあって、より優秀な重防食システムとして結合させ、限りある資源を守りつづけていきます。

●創造と調和をめざす●

DNT
大日本塗料

●大阪市此花区西九条6-1-124
〒554 ☎(06)461-5371(大代)
●東京都千代田区丸の内3-3-1
〒100 ☎(03)216-1861(大代)